

# 中学生の自己開放性について

蔭山英順<sup>1)</sup> 久世敏雄  
続 有恒 ほか 過疎研究グループ

## はじめに

自己開放性 (self-disclosure) の問題は基本的には精神的健康なパーソナリティー (healthy personality) へのプロセスとして、Jourard, S. M. (1959) は位置づけており、個人的情報を他人に打ちあける行為を、自己開放性 (self-disclosure) と呼んでいる。Jourard, S. M. (1958) は自己開放性を性差、人種の差、未婚および既婚等の側面から質問紙法によって検討しており、さらにその self-disclosure を規定する要因として parental-cathexis をあげている。また、この自己開放性は、その個人の属する社会の文化や他者との関係などのさまざまな要因によって規定されると同時に、一方で発達の条件によっても規定されることが予想される。依田 (1963) によれば、一般に青年期においては自己閉鎖的傾向が強くなるといわれており、その事が青年の社会適応上の問題を生ぜしめている。この意味において自己開放性の問題は発達的に見て、青年期にとっては重要な問題となる。さらに personality 形成の重要な時期におけるこの自己開放性の問題は、より健康な personality を形成していくうえでも、その青年期を中心とした詳細な発達的研究の必要性がある。

また大熊ら (1972) によれば、大都市への人口集中による人口の過密化と山間僻地よりの人口流出と過疎化現象は現在問題となっており、最近では逆に精神障害による青年層の帰郷が目立っており、いわゆるUターン現象を精神衛生的な側面から分析している。このように精神障害までもいかなくとも、精神的不健康な状態になる原因としては、やはり大きくは青年期まで、特に中学生の時期に過ぎてきた過疎地での文化と都市での文化に影響をうけていると考えられる。そこでこの意味から、healthy personality へのプロセスとしての self disclosure の問題は地域との関連においても検討されねばならないであろう。また地域の文化の影響としても多くの要因があり、われわれはその地域における人間関係のあり方を問題にする。従来、Jourard, S. M. は target

person として、父、母、男友達、女友達をあげているが、青年期における自己開放性の問題においては、兄弟、姉妹および先生も検討していく必要があると思われる。

われわれは青年期の自己開放性の問題にかかわる要因として、両親の養育態度を考えている。従来の養育態度の研究においては両親の愛情の認知 (affection) の問題と統制 (control) の側面にわけられる。愛情の認知の問題は Heilbrun, A. B. (1964) の8つの様式が参考になる。さらに統制はサイモンズのいう「支配—服従」の要因と関係しており、子どもが青年に達するまでには一般に親を中心とした支配・統制の関係が普通にみられる。そこから統制は target person に対する信頼感から見ていくことができるであろう。

われわれはすでに久世、蔭山 (1972) において大学生の自己開放性の問題を検討してきた。そこで発達的に検討する意味で今回は中学生の自己開放性を検討しようとする。

さらに地域差の問題を加えて中学生の自己開放性の要因を検討する。

中学生の自己開放性の問題は加藤 (1965) によってすでに検討されているが、さらに自己開放性の発達の検討と過疎地と都会という地域差をも加えて、検討する。

## I 目 的

中学生の自己開放性において(1)自己開放性の程度、(2)自己開放性の領域による程度、(3)自己開放の対象となる対人別の程度に関して過疎地と都会の地域差、および性差の検討をし、性差については大学生のデータと比較考察することにより、自己開放性の発達の側面を考察する。地域差については中学生の自己開放性に影響をもたらす社会・文化的側面から考察する。

また自己開放性にかかわる要因として両親の愛情の認知、および自己開放の対象に対する力の認知の要因としての信頼感に関して地域差および性差を検討する。

## II 方 法

自己開放性、両親の愛情の認知、信頼感に関する測定はすべて質問紙法を用いた。自己開放性の測定について

1) 名大大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程学生

は、困った場面における領域を(1)家庭生活、(2)身体・性格、(3)勉強・成績、(4)友人関係、(5)学校生活、(6)進学・就職、(7)人生・社会観の7領域とし、21項目で構成した。各項目について、父、母、兄弟・姉妹、親友、先生にどの程度、自己をうちあけて話すかをそれぞれ三段階で評定させた。この自己開放性の測定のための質問紙の作製過程および具体的質問項目については、すでに久世・蔭山(1972)において詳細に報告してあるのでここでは省略する。また力(pawer)の要因としての信頼感の測定は、自己開放性を測定するための21項目のそれぞれについて、もっとも重要な意見・判断として頼る順位を父、母、兄弟・姉妹、親友、先生に対して評定させた。

両親の愛情の認知に関する測定は Heilbrun, A. B. (1964) のいう8つの mode.—(1)愛情Ⅰ, (2)愛情Ⅱ, (3)被験者の是認と彼の行動の是認, (4)パーソナルな感情や経験の共有, (5)被験者に与える具体的物品, (6)責任を果たしたり, 個人的興味を追求したりするときの被験者への激励, (7)被験者におかれる信頼, (8)両親との関係において被験者の感ずる安全感—を参考に8項目を作成し、3段階に評定させた。

### 対象

中学2年生を対象にし、都会の地域としては名古屋市内のK中学校とH中学校を、過疎地域としては長野県下伊那郡上村の中学校と熊本県球磨郡水上村の中学校で調査を実施した。そのうち両親ともに健在であり、一人子でない児童を対象とした。有効調査人数は過疎地域89名(男子44名, 女子45名), 都市では330名(男子166名, 女子164名)であった。なお都市の調査は1972年2月~3月に、過疎地は1971年7月~8月に実施した。

### 過疎地域について

われわれは1970年から「いわゆる過疎地域の家族関係」の研究をはじめており、この調査はその一部として行なわれたものであり、したがって過疎地域の選択に関しては他の研究との関連において選択された地域の一部に実施した。本調査の目的から現段階では過疎の形態を充分考慮して、それによる検討を試みることではないので、過疎地域という次に述べる定義にしたがって2地域を過疎地域として集合した。「いわゆる過疎地域の家族関係」の研究では、1950年、1955年、1960年、1965年の各国勢調査の結果および1969年の各県の人口調査の結果から、毎回10%以上の人口減が継続している町村であること、地理的条件からして、比較的隣接町村からの影響が少なく、孤立的と考えられる地域であること、およびわれわれの現実的条件から考えて実働6日間の調査が可能であることなどを考慮して選定した。その結果、(1)

長野県下伊那郡上村、(2)山形県最上郡大蔵村沼の台地区、(3)愛知県北設楽郡富山村、(4)鳥根県飯石郡頓原町、(5)熊本県球磨郡水上村の5地域を1970年8月から1971年8月までに調査したが、本調査は1971年7月~8月に前記2地域において行なった。なお過疎地域の概況について詳細に続有恒ら、(1970, 1971)に報告したので省略する。

## Ⅲ 結果

### 1. 自己開放性

結果の整理は、「全然打ちあけない」に0点、「どんなことに困っているかということだけをうちあける」に1点、「すべてうちあける。従って、その人は、あなたがどんなことで困っているかをよく知っている」に2点を与えて得点化した。従って、得点の高いほど自己開放的であることを意味している。

表1は、父・母・兄弟姉妹・親友・先生のそろって

表1 中学生の自己開放性

地域 \ 性別		平均, 標準偏差	M	S. D.	t 検定*
都会	男子	64.67	36.22		
	女子	85.18	35.12		
過疎地	男子	82.66	40.45		
	女子	80.98	36.23		

\* t 検定の—は0.001, - - -は0.01, ……は0.05水準での有意性を示す。(以下すべての表に共通である)

る被験者について、7領域21項目の総得点の平均(M)ならびに標準偏差(SD)を男女別、地域別に示したものである。全項目ともに、2と記入したときの最高可能得点は210点になる。

表1によれば、中学生は困った事態において、全般的にみて自己を開放しない傾向にある。またこの傾向は、都会においては明らかに性差がある。つまり都会においては、女子の方が明らかに自己開放的である。また、この性差は過疎地ではみられないことは、興味のある事である。要するに、都会の男子が他と有意な差をもって自己開放性が低く、その他の都会の女子、過疎地の男・女は、ほぼ同程度の自己開放性を示している。

### 2. 対人別自己開放性

表2および図1, 2は、表1の総得点を対人別・地域別・男女別に示したものである。表2および図1, 2から、全体的傾向として親友・母にもっとも開放的であり、先生に対してもっとも開放的でない。男子では、親

表2 中学生の対人別自己開放性

性別	地域別	父			母			兄弟・姉妹			親友			先生		
		M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定
男	過疎	16.91	10.25		19.57	10.74		13.66	12.05		19.43	8.04		13.09	10.84	
	都会	13.95	9.61		16.37	9.87		11.50	11.44		15.14	8.58		7.70	7.62	
女	過疎	13.49	9.56		19.60	9.76		14.27	9.82		22.91	9.34		10.71	9.50	
	都会	14.62	9.52		23.35	9.99		16.27	12.78		23.65	9.71		7.28	7.07	

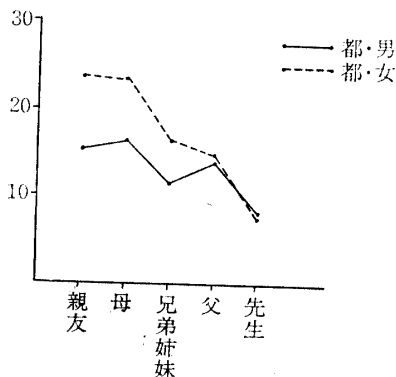


図1 都会における対人別自己開放性

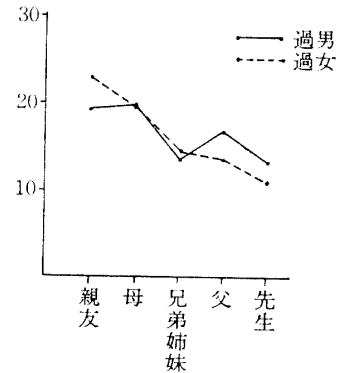


図2 過疎地における対人別自己開放性

友・母、ついで父・兄弟姉妹・先生の順であるが、女子では男子と同様、圧倒的に親友・母に対して開放的であり、そして兄弟姉妹・父・先生の順に開放的である。女子では兄弟姉妹と父とはほぼ同程度であるが、男子は父の方が兄弟姉妹より自己開放的である。従って順位では父と兄弟姉妹への自己開放性に性差が見られ、男子にとっての父親は兄弟姉妹よりも母に次いで自己開放性の高い位置となり、女子にとっては兄弟姉妹とほぼ同じ位置となっている。さらに地域による性差については、過疎地においては、全く対人別の自己開放性において性差はみられない。しかし、都会においては父と先生以外は性差

がみられ、親友・母・兄弟姉妹とすべて女子の方が自己開放的である。

地域差については、男子では母・親友・先生において有意に、過疎地の方がより自己開放的であり、父と兄弟姉妹においては有意な差はみられなかった。女子においては母に対しては都会の方が、先生に対しては過疎地の方がより自己開放的であり、父・兄弟姉妹・親友においては有意な差はみられなかった。先生に対しては過疎地の方が都会よりも男女ともに自己開放的である。父・兄弟姉妹は男女ともに地域差がみられなかった。さらに父に関しては性差も地域差も全くみられていない。

表3 中学生の領域別自己開放性

性別	地域別	家庭生活			身体・性格			勉強・成績			友人関係			学校生活			進学就職			人生・社会観		
		M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定	M	S.D.	t検定
男	過疎	8.89	5.58		10.00	6.60		13.64	7.20		8.18	6.05		11.86	6.69		18.11	7.12		11.98	7.23	
	都会	7.30	5.49		6.74	5.12		10.58	6.64		5.64	5.24		9.01	5.80		15.84	7.92		9.57	7.22	
女	過疎	8.71	5.62		9.49	5.35		13.44	6.40		8.58	5.73		10.84	5.64		17.78	7.38		12.13	7.14	
	都会	9.20	5.21		9.43	4.77		13.04	6.51		9.71	5.18		11.93	6.01		19.67	7.26		12.81	7.04	

### 3. 領域別自己開放性

領域別の自己開放性を男女別・地域別に示すと、表3の通りである。この最高可能得点は30点である。

表3から領域別の結果をみると、男女ともに、「進学・就職」の問題は、他の6つの領域、すなわち「家庭生活」「身体・性格」「友人関係」「学校生活」「勉強・成績」および「人生・社会観」の問題とは異なって、この領域が最も自己開放的である。次に、性差についてみると、都会では女子は男子よりもすべての領域で自己開放的である。一方過疎地では、性差はすべての領域で見られない。地域差についてさらに検討すれば、男子では「家庭生活」「進学・就職」「人生・社会観」では地域差がみられないが、他の4つの「身体・性格」「勉強・成績」「友人関係」「学校生活」の領域では過疎地の方が有意により自己開放的である。女子においてはすべての領域において地域差はみられない。

### 4. 対人別信頼感

対人別の信頼感を男女別・地域別に示すと表4の通りである。この最高可能得点は42点である。

表4および図3・4から、全体的傾向として信頼感は母親に最も高く、先生に最も低い。男子では、母・父・親友・兄弟姉妹・先生の順に信頼感は低くなっている

が、女子では母に最も高く、次に親友の順序で信頼感をもち先生には最も低い。従って母に対しては最も信頼感をおくことは性差がみられないが、父と親友においては、男子では父が、女子では親友が二番目になっている点が異っている。さらに地域による性差は都会においては、母と親友に対する信頼感は有意に女子の方が高く、父と先生に対しては有意に男子の方が高く、兄弟姉妹には性差がみられなかった。過疎地においては、親友に対する信頼感は有意に女子が高く、父に対しては有意に男子が高く、母と兄弟姉妹と先生に対する信頼感は性差がみられなかった。地域差については、男子では信頼感はすべての人に対する差はみられず、女子では母において都会が有意に高い信頼感を、先生において過疎地が有意に高い信頼感をもっている。また、父・兄弟姉妹・親友に対する信頼感には有意差がみられなかった。兄弟姉妹においては性差も地域差もみられなかった。父においては男子の方が信頼感が高く、親友は女子の方が信頼感が高く、地域差はみられない。

### 5. 親の愛情の認知

表5に示すように、親の愛情の認知ではすべて性差も地域差もみられなかった。

### 結果のまとめ

表4 中学生の対人別信頼感

性別	対人地域別	父			母			兄弟姉妹			親友			先生		
		M	S. D.	t検定	M	S. D.	t検定	M	S. D.	t検定	M	S. D.	t検定	M	S. D.	t検定
		男	過疎	48.55	15.32		51.77	12.31		34.80	21.88		42.77	18.51		32.23
	都会	48.15	15.63		52.22	13.54		37.34	22.70		45.94	16.88		26.36	18.16	
女	過疎	41.53	13.80		53.07	12.68		37.04	17.83		50.09	14.73		28.31	14.69	
	都会	40.37	14.86		59.45	11.79		39.65	20.40		52.30	14.43		18.23	15.76	

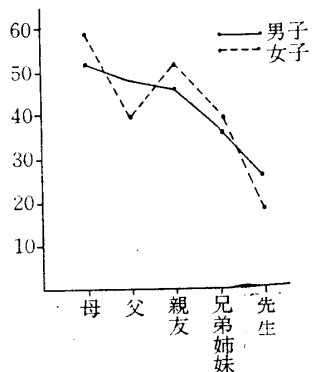


図3 都会における対人別信頼感

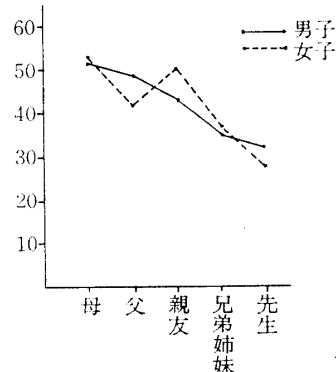


図4 過疎地における対人別信頼感

表5 中学生の認知した親の愛情

性別	地域別	父			母		
		M	S D	t検定	M	S D	t検定
男	過疎地	18.91	3.03		19.77	2.80	
	都会	18.81	3.26		19.70	3.09	
女	過疎地	18.84	2.96		19.73	2.50	
	都会	19.54	3.37		20.79	2.70	

中学生の自己開放性は低く、対人別には母と親友に自己開放性は高く、先生に対しては最も自己開放性は低い。さらに「進学・就職」の問題に対する領域が最も自己開放性が高い傾向が見られる。対人別信頼感において母に最も高く、先生に最も低い。また両親の愛情認知においては性差も地域差もみられない。

#### (1) 性差について

(a) 都会の中学生について；都会においては自己開放性は女子の方が男子よりも高く、その対人別内容では女子の方が親友、母、兄弟・姉妹に対して男子よりも自己開放性は高い。父と先生に対しては性差がみられない。領域別内容ではすべての領域において女子の方が男子よりも自己開放性が高い。

都会における対人別信頼感では、母と親友に対しては女子の方が男子よりも高い信頼感を持ち、父と先生は男子の方が女子よりも高い信頼感を持っている。兄弟・姉妹に対しての信頼感は性差がない。

(b) 過疎地の中学生について；過疎地においては自己開放性に性差が無く、また対人別自己開放性においても、領域別自己開放性においても性差は無い。

過疎地における対人別信頼感では、親友に対しては女子の方が男子よりも高い信頼感を、父に対しては逆に男子の方が女子よりも高い信頼感を持っている。母、兄弟姉妹、先生に対する信頼感は性差がない。

(c) 地域差のない性差について；対人別自己開放性において、男子では父の方が兄弟、姉妹よりも自己開放性が高い。しかし女子では父と兄弟・姉妹に対する自己開放性に差がない。また父と先生に対する自己開放性に性差はない。

対人別信頼感においては母に対して最も高い信頼感を持ち、先生に対しては最も低い信頼感を持つ。この傾向には性差がない。2番目に高い信頼感を持つ人は女子では親友、男子では父である。男子は父に対して女子よりも高い信頼感を、女子は親友に対して男子よりも高い信頼感を持っており、兄弟・姉妹に対する信頼感は性差がない。両親の愛情認知に関しては性差がない。

#### (2) 地域差について

(a) 中学生男子について；男子においては自己開放性は過疎地の方が都会よりも高く、その対人別内容では、過疎地の方が母、親友、先生に対して都会よりも自己開放性が高く、父と兄弟・姉妹に対する自己開放性は地域差が無い。領域別内容では過疎地の方が「身体・性格」「勉強・成績」、「友人関係」、「学校生活」において都会よりも自己開放性が高く、「家庭生活」、「進学・就職」、「人生・社会観」においては地域差がない。

男子における対人別信頼感に地域差は無い。

(b) 中学生女子について；女子においては自己開放性に地域差はない。対人別自己開放性では過疎地の方が先生に対して都会よりも自己開放性が高く、逆に母に対しては都会の方が過疎地よりも自己開放性が高い。父、親友兄弟・姉妹に対する自己開放性には地域差はない。領域別自己開放性には地域差はない。

女子における対人別信頼感に母に対しては都会の方が過疎地よりも高く、逆に先生に対しては過疎地の方が都会よりも高い。兄弟・姉妹、父、親友においては地域差はない。

(c) 性差のない地域差について；対人別自己開放性において、先生に対しては過疎地の方が都会よりも自己開放性が高く、父と兄弟・姉妹に対する自己開放性には地域差がない。領域別自己開放性においては、「家庭生活」、「進学・就職」、「人生・社会観」には地域差はない。

対人別信頼感において、父、兄弟・姉妹、親友に対する信頼感には地域差がない。また両親の愛情認知においても地域差はない。

## IV 考 察

### 1. 発達の視点からの自己開放性の検討

—大学生との比較により—

われわれは大学生の自己開放性の問題を久世・蔭山(1972)において発表した。そこにおけるデータと比較するなかで中学生の自己開放性の問題を以下検討する。

自己開放性の総得点においては大学生の男子よりも中学生の男子の方がより自己開放的である。(大学生男子M; 58.41, S D; 32.31), しかし女子においては逆に大学生の方がより自己開放的である。(大学生女子M; 91.08, S D; 34.36), つまり、女子大学生、女子中学生、男子中学生、男子大学生の順に自己開放的でなくなっている。したがって女子においては中学から大学になるにしたがって自己開放的となり、男子は逆に中学から大学になるにしたがって自己開放的でなくなる逆の現象がみられる。このことはさらに対人別、領域別のところでも検討する。しかし一般的に Jourard, S. M. (1958),

加藤(1965)が指摘するように中学生においても大学生においても女子の方が男子よりも自己開放的な傾向にある。

対人別自己開放性において、大学生は親友に対して、最も自己開放的であり、先生に対して、最も開放的でない。この点においては中学生と共通しているが、中学生は母が親友と同程度に自己開放性の対象者(target person)となっている。また大学生では父、母、兄弟・姉妹の間にはほとんど自己開放性に差がない。しかし父親に対する自己開放性の順位としては、大学生の男子では親友、母について、第3番目になっており、大学生の女子では親友、母、兄弟・姉妹について第4番目であり、大学生女子においては家族内の対象者で最も低い自己開放性の対象となっている。中学生の男子では大学生の男子と同じ傾向を示し、父の方が兄弟・姉妹よりもより開放的である。中学生女子では大学生女子と異って父が兄弟・姉妹と同程度である。この点で中学生の女子はまだ父に対しては自己開放性が高く、中学生の女子にとっては家族内での自己開放性の対象として大学生よりも意味を持っており、男子においては兄弟・姉妹よりも父を重要な開放性の対象となっている。父以上に中学生にとって重要な自己開放性の対象となっているのが母であり、親友とほぼ同程度の自己開放性となっている。大学生では母は親友と明らかな差をもって親友よりも自己開放性が低い。一方、中学生は親友と母と同程度であるか、母の方がより開放的である傾向がある。つまり中学生にとって性差なくまだ母親が親友と同程度に重要な自己開放性の対象となりえているが、大学生の年令ともなるとその母親の重要性は親友と大きな差がついてき、低い自己開放性の対象となってしまう。しかし低くなるとはいえ、親友との相対的な関係で低くなり、絶対的な自己開放性においては変わらない。大学生の女子が中学生の女子よりも自己開放性が高い傾向をすでに述べた。対人別においては、父、母、兄弟・姉妹・と家族全体に対してほぼ同程度に中学生よりも自己開放的になっているが、親友がきわだって自己開放性の高い対象となっている点で大きく自己開放性の差が見られてくる。したがって、中学生段階ではまだ両親への依存度は高く、特に母への依存は高い。しかし大学生になると両親からの独立がなされ、親友が重要な位置をしめ、母の役割の重要性は他の家族構成員とほぼ同じになってしまう。先生に対する自己開放性は中学生でも大学生においても最も低い点は変わらないし、その程度においても中学生と大学生では差がない。

領域別自己開放性においては大学生も中学生も「進学・就職」の問題に最も自己開放性が高く、その他の領域

では差が見られない。また大学生ではすべての領域に女子は男子よりも自己開放的であるが、その傾向は中学生では都会にのみ見られ、過疎地では性差は見られていない。この地域差については次の項で検討する。

## 2. 中学生の自己開放性にみられる地域差の検討

自己開放性の総得点において女子には地域差がみられないが、男子においては都会の方が自己開放的でない。また対人別自己開放性では先生に対する自己開放性が都会の方が男女ともに過疎地よりも低い。先生に対する自己開放性は最も低い対象であるにもかかわらず、都会における方がさらに自己開放性が低いことは、現在の学校教育における教師の役割の問題のヒズミが都会においてさらに顕著に示されているのではないかと推測される。この事は性差が見られていない点からも強く感じられる。さらに父と兄弟・姉妹においては地域差がない。過疎地域では父親はほとんど出稼で顔を合わせる機会が1年のうちに限られた期間になっている現状であり、したがって父親の役割を果たすことは物理的に存在していない状況で不可能になっている。そのような状況と同様の事が心理的に都会にもおこっており、父親が物理的に存在していても中学生にとっては重要な役割を果たさない存在と化してしまっていることなのであろうか。同じことが兄弟・姉妹においても考えられ、過疎地域では兄や姉は中学を卒業すると同時に家族から別れて就職し、物理的に自己開放の対象となりえない。それと同じ現象が物理的に同じ屋根の下で生活しながら自己開放の対象は過疎地域と差がみられないことは、父親と同じように重要な役割を果たさない存在と化している。そのような一般的中学生の傾向に加えて、男子においては母、親友、先生に対して過疎地の方が自己開放的であり、女子においては先生に対して過疎地の方が自己開放的であり、母に対しては都会の方が自己開放的である。つまり男子においては過疎地の方が自己開放的であるのは母、親友、先生により自己開放的であり、女子では自己開放性に差はないが、過疎地では先生へのウエイトが、都会では母親のウエイトが異っているのであろう。過疎地の母親はかなりの人が昼間働きに出ており不在の家族が多く、先生へのウエイトがかかってくる。「家族生活」、「進学・就職」、「人生・社会観」においては地域差がなく、性差もなく中学生の共通の問題であり、その自己開放性に差がない。しかし女子においてはすべての領域において地域差はなく、ただ都会の男子が「身体・性格」、「勉強・成績」、「友人関係」、「学校生活」と自己閉鎖的であるのは、学校周辺での問題において、都会での中学生において学校をめぐる諸問題において非常に問題を持つ

ていることがわかる。このことは教師および家族の者の学校教育に対しての重要な見方をし、かなりの中学生にとって圧力となっていることを示すものではなかろうか。

### 3. 両親の愛情認知と信頼感について

われわれは自己開放性に影響をおよぼす重要な要因として、両親の愛情認知 (affection) と信頼感 (power) の要因を考えている。

そこで、第1に両親の愛情認知であるが、表5に見られるように中学生においては、両親の愛情はかなり高く認知し、父母に対して好意的な感情を示している。さらに父母に対する愛情の認知において性差も地域差も見られない。久世 (1972) の大学生の値と比較しても全く差が見られない。このことは子供の年齢によっても、また地域によっても、あまり変化の見られないものであり、中学生の段階ですでに両親の愛情を評価し、理解できることを示すものであろう。

次に信頼感の要因について検討すると、久世 (1972) の報告のなかでは、「中学生から大学生と年齢が進むに従って父母に対する信頼度が低くなっている。大学生男子を除いて、父に比べ母に対する信頼感が高く、中学生、大学生ともに、特に、女子の母に対する信頼度の高いことがわかる。」と報告している。父に比べ母に対する信頼感中学生において高いということは地域により差はない。しかしながら過疎地においては、母に対する信頼感男女差がなく、都会の中学生、大学生における女子の母に対する信頼感が男子よりも高いという性差は見られず、過疎地における女子の母に対する信頼感が都会の女子よりも低いことを示し、結果的に性差が見られていない。

中学生においては親友に対する信頼感、大学生においては明らかに親友の方が母より高いのであるが、ほぼ母と同じ程度で高い。その意味で中学生の自己開放性において親友の重要性は母と同じ程度に重要性をもってくる。さらに親友に対する信頼感女子の方が男子よりも高く、地域差のない傾向として見られている。中学生にとって、母を除く家族構成員の誰よりも高い信頼感を持っていることがわかる。さらに家族構成員以外のもう一人の対象者である先生については、都会よりも過疎地の方が高い信頼感を、女子よりも男子の方が高い信頼感を持っている。

父と兄弟、姉妹への信頼感においては男子では明らかに父への高い信頼感を、女子では父と兄弟・姉妹と同程度の信頼感をおいており、父への信頼感女子において男子より低いいため、結果的に兄弟・姉妹と同程度の信頼

感となっている。兄弟・姉妹への信頼感、地域差も性差も見られない。

最後に先生に対して、最も低い信頼感を持っているということは、性差、地域差なく見られる。なお最も低い信頼感ではあるが、都会における女子のみが他の都会の男子、過疎地の男子、過疎地の女子にくらべて低い信頼感を持っている。このことは一般的に中学生の先生に対する信頼感低いのであるが、特に都会の女子中学生にその傾向が強いことがわかる。

自己開放性と両親の愛情の認知、および信頼感についての細かな検討は久世ら (1972) によってされているので、ここでは省略し、地域差を中心とした両親の愛情の認知と信頼感の実態について検討してきた。

### 文 献

- (1) Heilbrun, A. B. Jr. 1964 Parental model attributes, nurturant reinforcement and consistency of behavior in adolescents. *Child Development*, 35, 151-167.
- (2) Jourard, S. M. & Laskow, P. 1958 Some factors in self-disclosure. *J. abnorm. soc. Psychol.* 56, 91-98.
- (3) Jourard, S. M., 1959 Healthy personality and self-disclosure. *Mental Hygiene*, 43, 499-507.
- (4) 加藤隆勝 1965 中学生における自己の閉鎖性と開放性 岐阜大学学芸学部研究紀要人文科学 14, 54-61.
- (5) 久世敏雄 1972 青年と世代の断絶 現代青年心理学講座 6, 1-52. 金子書房
- (6) 久世敏雄・蔭山英順 1972 a 困った場面における自己開放性についての一研究 (印刷中)
- (7) 久世敏雄・他 1972 b 困った場面における親の信頼感についての一研究 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 19.
- (8) 大熊輝雄・他 1972 人口流出と精神障害による帰郷 (いわゆるUターン現象) について 精神医学 14, 715-723.
- (9) 統 有恒・他 1970 いわゆる過疎地域の家族関係 (1) 一序報 (その1) — 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 17, 47-62.
- (10) 統 有恒・他 1971 いわゆる過疎地域の家族関係 (2) 一序報 (その2) — 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 18, 17-32.
- (11) 依田 新 1963 青年心理学 培風館

## ON THE SELF-DISCLOSURE OF THE JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS

Hidenori KAGEYAMA, Toshio KUZE, Aritsune TSUZUKI, and "KASO" group

The questionnaire for assesment of the self-disclosure, perceived parent's affective modes, and trust to various target-persons was used. Groups of "Boys" and "Girls", "Cities" and "Too Thinly-Peopled Communities", so-called "KASO", were tested with the questionnaire for extent of self-disclosure which included the seven subcategories. The seven subcategories are "home and family", "physical feature and personal character", "academic achievement", "friend relationship", "school life and teacher", "educational and vocational future" and "philosophy of life and religion". On each subcategories, the extent of self-disclosure was assessed to five target persons,— "Father", "Mother", "Friend", "Brother and Sister" and "Teacher".

The findings are summarized as follows:

1. Boys of junior high school in the city closed more than girls in the city and junior high school students in the so-called "KASO".
2. Junior high school students showed the most self-disclosure to "Mother" and "Friend" and the lest self-disclosure to "Teacher".
3. The boys disclosed more to "Father" than to "Brother and Sister", but the girls showed no significant differences between "Father" and "Brother and Sister".
4. Girls of the junior high school in the city disclosed more to "Mother", and "Brother and Sister". than boys, and did not show the significant sex difference to "Father" and "Teacher". The students in the so-called "KASO" did not show the significant sex difference to the all target persons.
5. Boys in the so-called "KASO" disclosed more to "Mother", "Friend" and "Teacher" than boys in the city. The girls in the so-called "KASO" disclosed more to "Teacher" than girls in the city, but girls in the so-called "KASO" disclosed less to "Mother" than girls in the city.
6. Junior high school students showed the most self-disclosure in "education and vocational future".
7. In the city, girls showed more dislosure than boys in the all sub-categories. In the so-called "KASO", we could not owe the significant sex differense on self-disclosure in the subcategories.
8. Boys in the so-called "KASO" disclosed more than boys in the city in "physical feature and personal character", "academic achievement", "school life and teacher." On the girls the all subcategories did not show the difference between the so-called "KASO" and the city.
9. The most trust was showon to "Mother" and the lest trust to "Teacher".
10. The extent on perceived parent's affective modes were not only different between boys and girls, but also between the city and the so-called "KASO".